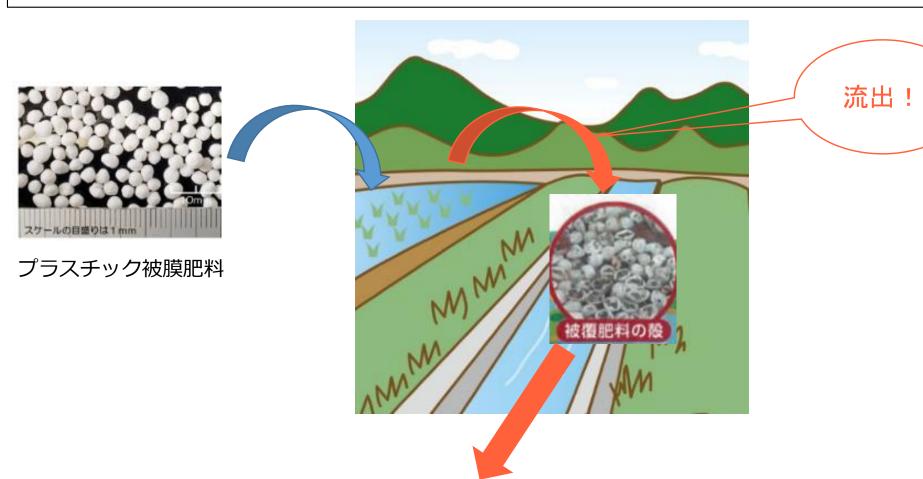
プラスチック被膜肥料について

- プラスチックを使用した被覆肥料は、作物の生育に応じて肥料成分が溶け出すことから、追肥の手間が省けて省力化できるとともに、肥料の投入量も減り、地下水への流出などが抑えられ、環境への負荷も低減可能。
- 一方で、<u>使用後の被膜殻がほ場から水路や河川を通じて海洋に流出</u>し、海洋汚染の要因となっていることが指摘されている。
- 令和2年にプラスチック被膜肥料の流出実態調査を行った結果、代かき直後に全流出量の9割以上が流出。



海へ(海洋汚染)

プラスチック被膜肥料流出対策

- プラスチック被膜殻を流出させない技術として、自然落水で水位を調整、浅水代かき、排水口におけるネットの設置等がある。令和3年にプラスチック被膜肥料の流出実態調査を行った結果、捕集ネットは、代かきから強制落水までの間、継続して設置することが妥当であると示唆された。
- プラスチック被膜殻の代替技術として、硝化抑制剤入り流し込み液肥、化学合成緩効性肥料、ドローンによる局所施肥、ペースト2段施肥技術等がある。
- プラスチック被膜肥料を使用する場合



- プラスチック被膜肥料を使用しない場合
- ① プラスチックを使用しない緩効性肥料への切替
 - 硝化抑制剤入り流し込み液肥
 - ・ 化学合成緩効性肥料(ウレアホルム等)



▲硝化抑制剤入り 流し込み液肥

- ② 省力的な施肥体系への切替
 - ドローンによる局所施肥
 - ・ペースト2段施肥技術



▲ドローンによる 局所施肥



▲ ペースト2段施肥技術